

# 複言語・複文化能力育成のための の教育システムと教員養成

SEP. 1<sup>ST</sup> 2011  
JACET 50 SYMPOSIUM 2,  
LANGUAGE EDUCATION IN THE 21<sup>ST</sup> CENTURY:  
CONTEXTUALIZING THE PLURILINGUAL AND PLURICULTURAL  
PERSPECTIVES IN JAPAN

慶應義塾大学経済学部

境 一三

skazumi@a8.keio.jp

## 目次

1. Plurilingualism & Pluriculturalism
2. 「学ぶことは使うこと」 二言語教育・CLILに対応できる教員養成
3. ドイツの教員養成
4. 日本の教員養成の問題
5. 結論: 複数言語教育の推進とそれに対応した教員養成システムの導入を

一言でいうと

学生は教師の背中を見て育つ

学生に要求することは自分自身にも課す

3

## PLURILINGUALISM & PLURICULTURALISM 1

- EUも欧州評議会も、全ての生徒が1+2言語を学ぶことを基本としている
- 現代の言語教育の目的(の一つ)は複言語・複文化能力養成
- 複雑・多様化する世界のありように対応する
  - A) 発信の多様化
  - B) 多言語・多文化化する日本社会

4

## PLURILINGUALISM & PLURICULTURALISM 2

- A) 発信の多様化
  - SAMSUNG(三星財閥)に後塵を拝した日本企業
    - 1990年に「地域専門家制度」を導入
  - 日本電産の取り組み
    - 2015年以降部長昇進には2外国語の習得を条件とする
- B) 多言語・多文化化する日本社会
  - 多様化する地域のリーダーを養成する
- 学生の複言語・複文化能力養成のためには、教員の複言語・複文化能力養成が前提となる
- 教員は常に異言語・異文化を学び続ける存在でなくてはならない

5

## 「学ぶことは使うこと」 二言語教育・CLILに対応できる 教員養成

- **Bilingual Education**: 生徒が二つの言語で教科科目を学ぶこと
  - Ex. Europaschule in Berlin
- **Content and language integrated learning (CLIL)**
  - 一般のギムナジウムにも広がりを見せている
- 日本でも、英語・ドイツ語・フランス語・ロシア語・中国語・朝鮮語などでコンテンツを学ぶ可能性を探るべきではないか？
  - 例) 中国語で日本の歴史を学ぶ→歴史観の転換(？)
  - Action-oriented: Learning by Doing
- コンテンツ科目を教えらるる教員をどう養成するか？(or NS 教員を雇用するか？)
  - 例) 英語で生物を教える、トルコ語で歴史を教える等

6

## ドイツの教員養成1

- 国家試験制度(大学の卒業試験が教員国家試験の1次試験、その後修習生を経て2次試験合格後採用)
- 中等教育の教員はすべて二科目担当
  - 例)生物と体育、歴史と英語 etc.
  - 必ずしも言語のみの組み合わせとは限らないが、独(国語)英・英仏、独羅なども多い
- ドイツのギムナジウム卒業時の目標値(州によって異なる): 第1外国語B2-C1、第2・第3外国語(低学年からの継続)B2、その他の外国語A2

7

## ドイツの教員養成2

- DaF(Deutsch als Fremdsprache = German as a Foreign Language)の教員養成
  - 入学条件として複数言語能力を明記している大学(調査対象30校中9校)
  - レベル規定がある大学は少ない:CEFR準拠、もしくは Latinum/ Graecum
    - Bochum大学: Kenntnisse in mindestens zwei modernen Fremdsprachen vorausgesetzt: In der einen Fremdsprache mindestens Kompetenzniveau B2, in der anderen Fremdsprache mindestens Kompetenzniveau B1 (下線、発表者)

8

## 日本の教員養成の問題

- 本格的な専門家養成とはほど遠い(?)
  - 英語以外は教員養成の体をなしていない(教員養成者がいない)
- 実習期間の短さ(週単位と年単位の差異)
- 大学教員は資格試験がない
- どのような言語能力を持っているか、またコンテンツに関する指導能力を持っているか、チェックがない
  - 二言語教育に堪えない
  - CLILに堪えない

9

## 結論:複数言語教育の推進とそれに対応した教員養成システムの導入を

- 中等教育における複数言語教育を当たり前のものとする(世界標準に合わせる)
- 言語担当教員(含国語)は常に複数の言語と文化を学び続ける
- 複数言語教育を教員養成課程に取り入れる
- 教員資格を得るために必要な外国語能力のレベルの基準作りが必要である(L2, L3...Ln)→私案
  - 言語教育担当者は、担当言語について、CEFRのC1以上の運用能力を持つこと
  - 言語教育担当者は、担当言語以外に最低一つの言語で、CEFRのB1以上の運用能力を持つこと

10